

専門学校のリカレント・エントリー者の 入学動機に関する研究

佛教大学大学院 美津峰子

抄 録

近年、専門学校は、新規高卒者（ダイレクト・エントリー者）にとって大学に次ぐ第2の進路選択肢として定着していると同時に、入学者の30%近くを社会人入学者（リカレント・エントリー者）が占めているという現状がある。本稿では、リカレント・エントリー者に着目したところ、リカレント・エントリー者の入学経路は多様で、入学動機は大別すると4要因に分類された。①OJT（企業内研修）からOff-JT（職場外研修）への移行により、職業能力を自己習得するため ②就職難のなかで経済的自立を図るべく、就職に有利な資格を取得するため ③リストラを危惧し、将来に向けての付加価値をつ

けるため ④困難な時代だからこそ、本来やりたかったことを目指し、自己実現を達成するため、である。これらは社会的要因を反映し、多くは専門学校が本来からもつ職業教育機能に期待した就業対策としての入学であった。その一方で、就職にこだわらない夢を実現するための入学があり、専門学校へは自己実現を果たすために入学している側面があることがわかった。

キーワード

専門学校 リカレント・エントリー者 職業教育機能 就業対策 自己実現

I. 近年の専門学校生の動向

1975（昭和50）年、学校基本法の一部改正により専修学校制度が創設された。専修学校は、入学資格により高等課程、専門課程、一般課程に区分され、そのうち専門学校と称されているのは、高卒者を対象とした専門課程を指し、現在では専修学校生の8割以上を専門学校生が占めている。

平成15年度の高等学校等新規卒業者（ダイレクト・エントリー者）の進学率は、大学36.3%、短大8.0%、専門学校18.8%、となっており、専門学校は昭和63年に短大を逆転して以来、大学に次ぐ進路選択肢として定着している¹⁾

（図1参照）。進学率の伸びは、大学と専門学校が右肩上がりである一方、短大は9年連続して下降している。しかも、前年度と比較した進学率の伸びをみると、大学が+0.1ポイント、短大が-0.4ポイントであるのに対し、専門学校は+1.2ポイントと着実な伸びを維持している。これは、専門学校の高等教育機関としての社会的教育機能が高まっていることを示しているといえる。

次に、専門学校の学生層のうち社会人入学者（リカレント・エントリー者）²⁾の割合をみると、10年前には25%弱であったのが、近年では30%近くを占めるようになった（図2参照）。

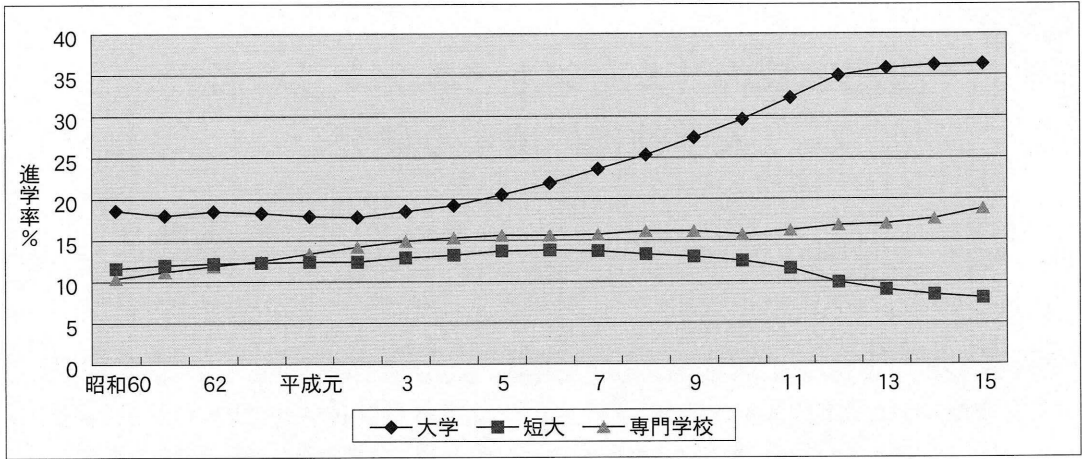


図1 新規高等学校卒業者の進学率の推移 (平成15年度学校基本調査より作成)

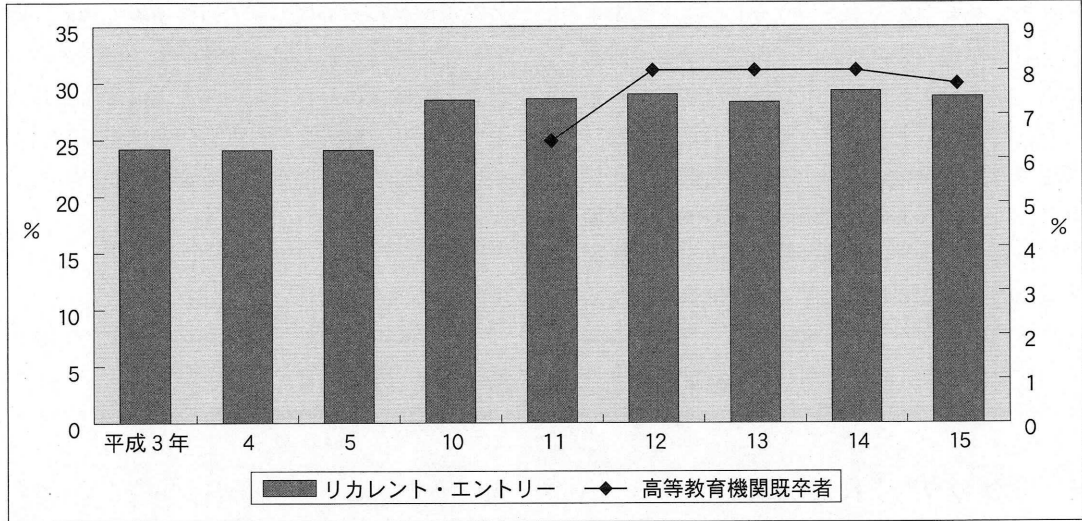


図2 専門学校生に占めるリカレント・エントリー者と高等教育機関既卒者の割合
 (平成15年度学校基本調査による専門課程入学者のうち、新規高等学校及び中等教育学校(後期課程)卒業者を除き算出して作成)

また、専門学校生に占める大学等の高等教育機関卒業者の割合は、文部省(現文科省)で調査が開始された平成11年度から、全体の約8%となっている(図2参照)。つまり、専門学校生は、10人のうち3人はリカレント・エントリー者であり、12人に1人は高等教育機関の既卒者となっている。

従来、高校卒業後の進路形態といえば、大学・

短大・専門学校等の高等教育機関への進学か就職、進学者も卒業と同時に就職するという一定のパターンがとられていた。しかし、昨今では様々な状況から、フリーターや学卒無業者が増加したり、リカレント・エントリー者が増加したり、多様な進路形態がみられている。これらのことから、専門学校には経歴や年代を異にするリカレント・エントリー者が在籍しており、

専門学校はダイレクト・エントリー者のみならず、リカレント・エントリー者のニーズにも対応した教育内容を提供することが求められているといえる。

このように30%近くにおよぶリカレント・エントリー者は、何を求めて専門学校に入学しているのであろうか。

原清治（2003）は、その要因を社会構造の変化からとらえて、①18歳人口の減少と高齢化にみる人口動態の変化、②生涯学習体系への移行、③長引く経済不況の「効果」をあげている³⁾。これは、1点目として、18歳人口の減少によりダイレクト・エントリーだけでは経営的に成り立たない学校側の内実から、新たな入学者として成人にターゲットが向けられたこと。また、高齢者の増加により成人の側から教育機会を求めていることがある。2点目は、1点目の高齢化とも兼ね合い、生涯学習への関心が高まり学校教育期間が終了した層が入学していることがある。3点目は、経済不況による倒産や終身雇用制の崩壊によるリストラ、厳しい就職難に対する就業対策である。このようなことから、専門学校のリカレント・エントリー者の入学には、社会構造の変化にともなう要因が単独、あるいは複合的に作用していると考えられる（図3参照）。

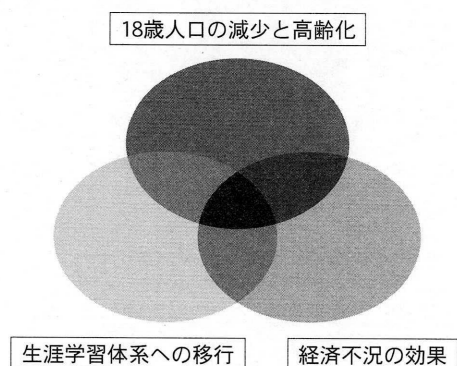


図3 社会構造の変化からみた専門学校のリカレント・エントリー者の入学要因（筆者作成）

そこで、本稿では、「リカレント・エントリー者は多年代におよび、さまざまな社会経験をもっているため入学経路が多様である。よって、入学動機も多様であることが予測されるが、専門学校の機能から考えると、そのなかには何らかの傾向があるのではないか」という仮説をたて、リカレント・エントリー者の入学動機を中心にインタビュー調査をおこない、その内容を分析した。

Ⅱ. 調査の内容と結果

大阪府下の専門学校に通学するリカレント・エントリー者を対象に、インタビュー調査を実施し、内容の分析を行った。まず、平成14年7月に福祉専門学校において調査を実施したところ、10～50歳代のリカレント・エントリー者30人の入学経路は21経路におよび、入学経路の多様性が明らかになった（図4参照）。次に、平成15年7～8月に専門学校のリカレント・エントリー者に対して調査をおこなった。調査の結果、リカレント・エントリー者の入学動機は、4つの要因に分類できた。

- ① OJT（企業内研修）からOff-JT（職場外研修）への移行により、職業能力を自己習得するため
- ② 就職難のなかで経済的自立を図るべく、就職に有利な資格を取得するため
- ③ リストラを危惧し、将来に向けての付加価値をつけるため
- ④ 困難な時代だからこそ、本来やりたかったことを目指し、自己実現を達成するため。

専門学校は、便宜上8分野⁴⁾に分類されており、ここでは現在学生数ある程度保っている6分野から、4つの要因の特徴を示す事例をあげて考察していく。学生数が維持できている分野は、学生や社会のニーズが寄せられている証とみることができよう（図5参照）。

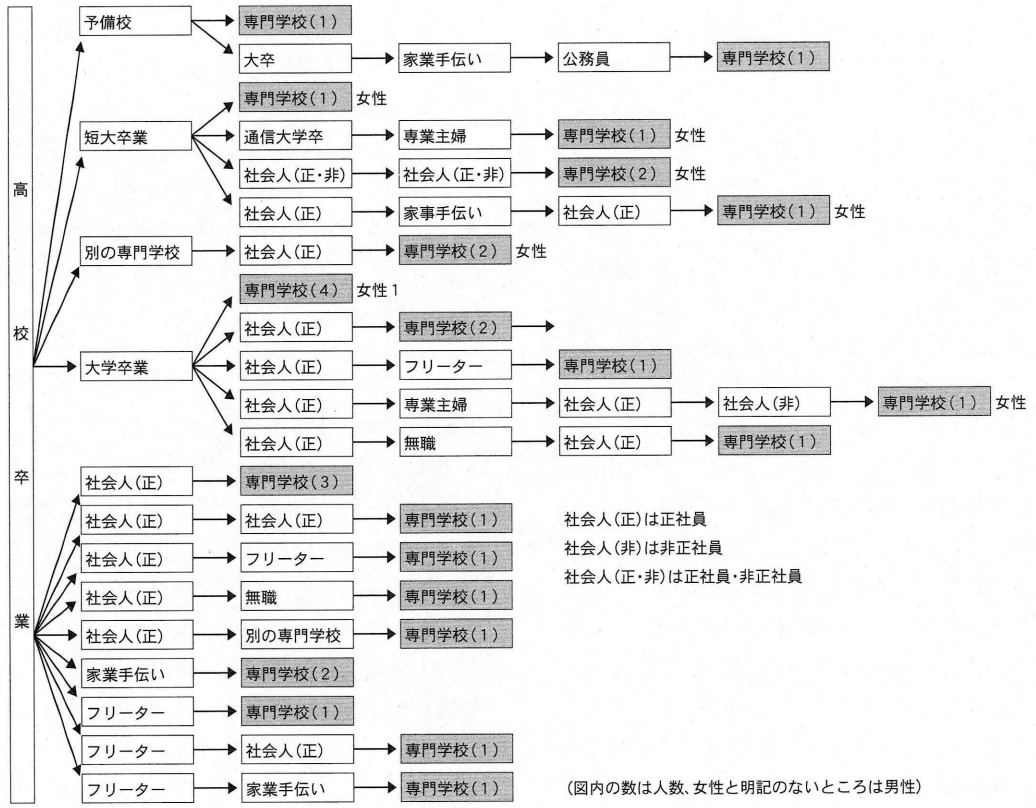


図4 リカレント・エントリー者の入学経路

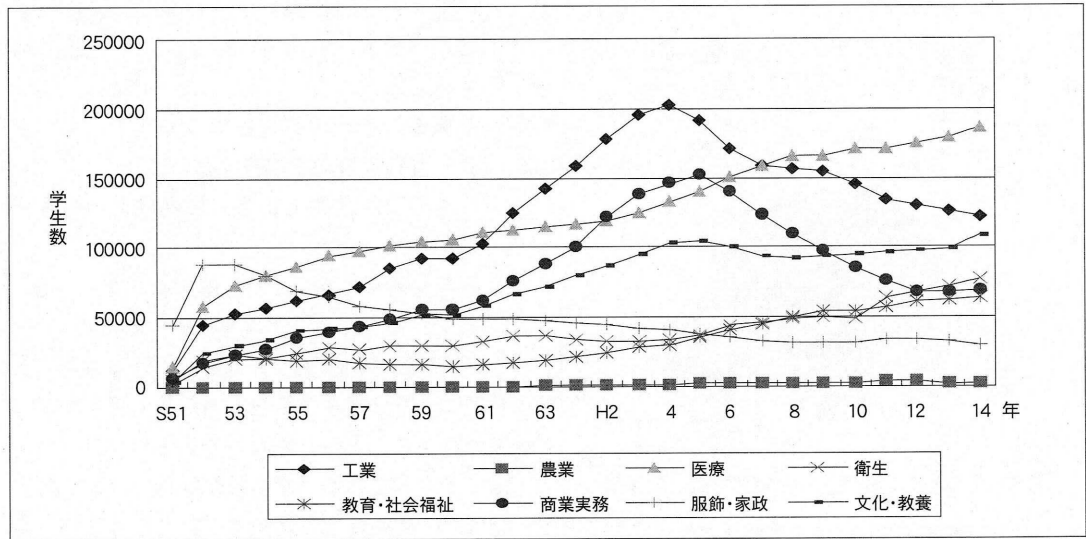


図5 専門学校の分野別学生数 (出典：図1に同じ)

(1) OJT（企業内研修）からOff-JT（職場外研修）への移行により、職業能力を自己習得するため

事例1【Aさん 20代男性 工業分野（システムアドミニストレーター）の専門学校】

質 問：「今の学校に入学するまでの経緯を、教えてください。」

Aさん：「大学出て、フリーターをして、1度就職して、辞めて、それから来ました。」

質 問：「大学時代に、就職活動をしたり、今の学校に入学することを考えたりされましたか。」

Aさん：「ええ、就職したかったんですけど、内定出ませんでしたね。専門学校のことは全然。予想外でしたね。」

質 問：「では、どうして、今の学校に来られたのですか。」

Aさん：「『資格取らないと、無理やな^①』って思ったので。」

質 問：「それは、どういうことですか。」

Aさん：「求人誌で就職したのが食品会社で。『簡単な入力作業』って書いてあったんですけど、入ってみると違いましたね^②。一応、事務職で入ったんですけど、在庫管理とかコンピューターで。それが、普通の入力だけじゃなくて、普通のことなら出来ますから^③。」

質 問：「それで、資格を取ろうと思われたのですか。」

Aさん：「資格というか、資格を取ったら、そういう技術も身に付かなと思って。習いたかったんです^④。」

下線①から、Aさんは、退職に至った過程で、コンピューター技術が充分でないことへの限界を感じたことがわかる。下線②③をみると、一般的なことからできると思っていたAさんであったが、企業が自分の能力以上のことを

求めている現実を目の当たりにしている。下線④から、Aさんにとっての資格とは、形式的なものではなく、企業社会で通用する技術や能力を身につけることを意味していることがわかる。しかし、自己学習で習得できるのではなく、人に教わって自分の就業能力を高めて就職できるように専門学校に入学している。

◆ かつて、その企業が必要とする従業員の就労能力は、企業内研修によって行われていた。しかし、経費節減により企業の責任から、各個人で企業が求める技術・能力を習得することを強えられる時代へと移行している。しかも、技術革新の進歩はめざましく、新たな就労能力をもち得ない者は職場に適応できないという状況にある。しかし、最新の技術や能力は個人の努力だけで得られるものではない。これは、若年労働者の雇用状況の厳しさに加え、中高年層にも同じことがいえる。就労意欲の高い健康な高齢者が増え、現役で働き続けたり、退職や失業後に就職を求めたりする場合、就労能力の獲得は必須条件となる。そのため、産業界や社会の変化に即応した教育内容を提供している専門学校の職業能力育成機能に期待して入学している。

(2) 就職難のなかで経済的自立を図るべく、就職に有利な資格を取得するため

事例2【Bさん 30代男性 教育・社会福祉分野（介護福祉士）の専門学校】

質 問：「どうして、今の学校に行かれたのですか。」

Bさん：「高校卒業して、家業の酒屋を手伝ってたんですが、自営やったんで、将来性ないなってことで、借金作らんうちに、店閉めよかってことで^①。」

質 問：「福祉系を選ばれたのは、どうしてですか。」

Bさん：「ええ、身内がデイサービスを利用し

ていて関心ありましたし、介護職は、求人が多いですから、『手に職をつける』っていうか、資格もらったら、就職につながりやすいですから②。」

下線①から、Bさんの家では、経営不振のために自営業を失業している。大型店舗の進出やスーパーでの酒類販売により、小売店の経営危機が深刻となり失業に至った1例である。下線②にあるように、Bさんは就職するために必要な資格の取得を目的に入学している。介護職は身内の介護を通じて職業イメージが描けていたことと、就職難の中でも比較的求人が多く確実に就職できる職種ということにこだわって、福祉系の学校に入学したことがわかる。

◆ 長期にわたる不況から、就職難が死活問題となって全世代に蔓延している。そのような状況下で就職先を確保するためには、有利な資格をもって臨むことが1つの手段となる。

昨今は、介護福祉士のように時代にマッチした新たな資格が創設されたり、かつては無資格で就業することができた臨床工学士などの職種においても、有資格者が優先的に採用されたり、資格の有益性が高まっている。そのため、就職に有利な資格の取得ができる専門学校に入学している。

(3) リストラを危惧し、将来に向けての付加価値をつけるため

事例3【Cさん 40代女性 教育・福祉分野(社会福祉士)の専門学校〔通信課程〕】

質問:「どうして、今の学校に行かれたのですか。」

Cさん:「他府県に居たんですけど、10年程前に主人の実家近くに移って来たんです。それで、役所に就職して、福祉の相談窓口で働いているんです。運が良

かったと思うんですよ。中途採用で公務員になれるなんて①。でも、今は、社会福祉士とか精神保健福祉士とか、資格をもった人が採用されるでしょ。市が合併するんで、もし合併したら、2つの役所が一緒になるわけだから、人が減られるでしょ。私は年齢もいってるから、資格がないと、1番に首切りされちゃうでしょ②。それに、働く限りは、相談に来られた方に、きちんとした情報やアドバイスをしたいから。でないと、自分も嫌だし③。」

下線①から、Cさんは公務員になれたことに満足しており、今のまま働き続けることを望んでいる。しかし、若い有資格者の入職や合併問題によって、リストラされることに不安を抱いている。そのため、資格を得ることで将来への安全策を講じていることが、下線②からわかる。また、仕事の専門性を深めるためにも資格が必要だと考えていることが、下線③からくみとれる。安定した就労先を得ることに加え、責任をもって業務を遂行するために努力している。仕事も家庭もあるEさんにとって、学業と両立させるためには、通信課程への入学が比較的就学条件が整えやすいと思われる。

◆ 経済不況の影は、有職者にも不安を与えている。定職に就いていても終身雇用は約束されたものではない。そこで、変化が激しい時代であるからこそ、先行きを見越した将来性のある資格への人気が高まっている。現在の仕事に関連した資格を得てリストラを予防したり、あるいは別の分野の資格を取得することでリストラ対策を講じたりしている。「将来への保険」代わりに付加価値としての新たな資格を取得するために、専門学校に入学している。

このような目的をもつリカレント・エントリー

者には、現職を継続しながら就学できる多様な就学スタイルが用意されていることが専門学校に求められているといえる。

(4) 困難な時代だからこそ、本来やりたかったことを目指し、自己実現を達成するため。

事例4【Dさん 50代男性 商業実務分野（税理士）の専門学校】

質問：「どうして、今の学校に行かれたのですか。」

Dさん：「公務員をしていたんですけどね、独立して税理士をしたいと思ってまして①。40代末から税理士試験を受けていたんですけど②、いやあ、難しいですね、何年経ちましたかね。最初は、息子の受験勉強の刺激になればと思って受験してたんですけどね。息子はさっさと大学生になって。それで、妻が『せっかくやるなら、専念したら』って言うてくれたので、思い切って退職しました③。」

下線①から、Dさんは、公務員に就きつつ、税理士を目指していることがわかる。しかし、下線②にあるように、何年も国家試験に失敗し達成できずにいた。そこで、Dさんの夢の理解者であり協力者である妻の後押しを得て、公務員の座を捨てて税理士になることに専念したことが、下線③からわかる。資格を取得するためには、学校で規定の課程を修得した者に対して卒業時に資格が与えられる場合と、国家試験の合格を経て資格取得ができる場合がある。Dさんは、自己学習だけで国家試験に合格することは難しいと考え、専門学校の国家試験対策という教育力を頼って入学している。

事例5【Eさん 20代女性 医療分野（看護師）の専門学校】

質問：「どうして、今の学校に行かれたのですか。」

Eさん：「高校を出てから、10年位事務やってて、それはそれで楽しくて、嫌じゃなかったんですけど①。母と妹が看護師で、いつも家で仕事の話してて、それで、『生き生きしてるなあ』って感じて、『何か、自分と違う』と思って②。」

質問：「『違う』というのは、どういうことですか。」

Eさん：「やりがいですね③。」

下線①から、Eさんには永年続けていた定職があり、取り立てた不満もなく働いていたことがわかる。しかし、下線②にあるように、家族の姿を通してやりがいのある仕事について考えるようになり、自分自身を振り返っている。Eさんにとっては、母親と妹のことが、家族というより職業人として映ったのであろう。下線③から、専門職としてのやりがいを求めて、入学したことがわかる。

事例6【Fさん 60代女性 商業実務分野（観光）の専門学校】

質問：「どうして、今の学校に行かれたのですか。」

Fさん：「永いこと、紳士服売り場の店員をしていたんですけど、定年で辞めたんです。その頃に、娘の留学が決まって、夫婦2人になって。でも、夫はまだ働いているし、ゆっくりするには早いし。そしたら、娘が、『お母さんも勉強したら』って言ったんです。娘は大学を出てから何年もチャンスを待って、やっと推薦留学で来たんです。それで、私も学校に行こうと思って①。」

質問：「今の学校を選んだのは、どうしてですか。」

Fさん：「行くなら絶対観光と決めてました。
旅行が好きなのもありますけど、私
は『高齢者の旅行』に興味があって。
『なぜ、日本は高齢者の海外旅行が多
いのか』とか、調べたいことがいっぱい
あるんです②。」

質 問：「学校に行かれて、どうですか。」

Fさん：「楽しいですね。働いてたときのよう
に、メリハリがありますね。友だちも
できましたし、先生方とも、いろんな
話ができますし③。」

下線①から、Fさんは、娘さんの薦めがきっかけで入学している。娘さんは努力して留学という形で生涯学習を実践しており、Fさんも同じような価値観をもっていたため、前向きに入学を決めたと思われる。それは、下線②にあるように、Fさんが、既に入学前から自分が学習したいテーマをもっていたことからわかる。下線③から、退職を機に家庭に籠りがちな生活にリズムができ、交友関係や話題も広がり、生活の質も高められたことがわかる。

資格や就職が第1の目的ではなく、個人の興味関心に即した学習が主目的である場合においても、多彩な学科がある専門学校は教育機会を得る絶好の場になっている。

事例7【Gさん 60代女性 文化・教養分野（英語）の専門学校】

質 問：「どうして、英会話をされているのですか。」

Gさん：「昔から英会話がやりたくてね①。短大の聴講生②
になったり、カルチャーセンター③
にも習いに行ってたんです。上手な人が聞いたら、『こじつけ
の英語』とか言われそうですけどね。
でも楽しいんですよ④。」

質 問：「どうして、専門学校を選ばれたので

すか。」

Gさん：「カルチャーセンターだと、講師の先生
がよく変わるんで、その先生の教え
方に慣れた頃になっちゃうと、私
らは年齢いってるし、また1からにな
るでしょ⑤。個人の先生⑥
にグループで習ってた時も、先生が引越したり
で終わってしまってた⑦。」

下線①④から、Gさんは英会話を楽しく学んでいることがわかる。下線②③⑤⑥にあるように、今までにも短大の聴講生、カルチャーセンター、個人の英会話教室とさまざまな学習機会を利用して学習を続けている。しかし、教育側の不十分な条件では、学習者は満足感が得られていなかったことが、下線⑤⑦からわかる。本当に好きで永く続けているGさんは学習意欲が高く、年齢的なことも考慮して自分に合った教え方を望んでいたたり、授業に求めるレベルも高いと思われる。その点で、しっかりした組織の中で、熟練した教師から系統立てた授業を受けるために専門学校に入学したと考えられる。

事例8【Hさん 50代男性 衛生分野（調理・栄養）の専門学校】

質 問：「今の学校に入学するまでの経緯を、教えて下さい。」

Hさん：「新聞社に就職して、途中で銀行員になりました。引き抜きでね。で、退職後に、入学しました。」

質 問：「どうして、今の学校に行かれたのですか。」

Hさん：「ええ、実は仕事の合間に親の料理店を手伝ってまして。料理の味は親から
教えられて、それが現在の私の料理に
対する愛情につながってると思ってま
す①。私には持病がありましてね、治療中なんです。余命は限られていると

思うんで、生きている間に料理を教えたり、料理の本を書いて読んでもらいたいという夢があるんです。」

下線①から、Hさんは、本業とは別にやっていた料理に深い関心を持ち、親から受け継いだ味にこだわりをもっていることがわかる。下線②から、自分の料理をたくさんの人に広めたいという思いは、単なる趣味ではなく生きがいになっている。もっと技を磨いて人生をかけて出版するという夢を実現するために入学している。

◆ 事例4・5のように、将来性や収入にも不満なく安定した就労をしていた人たちが、定職を自己退職して専門学校に入学している。これらの人たちが重視したのは、本当にやりたい仕事や、やりがいのある仕事である。永年の夢や新たな夢にこだわって、それを実現するために必要な受験資格や教育を受けるための入学である。専門学校は、場合によっては大学等の他の教育機関よりいち早く、社会の多様なニーズに対応して学科を新設して教育を行っているため、一般的な資格はもとより、最新の業種の育成にも対応できる。そのため、自分が本当にやりたい職業にこだわる者が就業対策として入学している。

事例6・7・8では、本当にやりたいことを目指している点では、事例4・5と共通している。しかし、就職目的ではない入学という特徴がある。自分らしい生き方として、やりたいことを追求している。さまざまな人生経験を積んできた者であるからこそ、本当にやりたいことが明確になり積極的に生きることができるのであろう。あるいは、着実な生き方といわれる人生を全うしていても、いつ困難に襲われるかわからない時代、同じ苦勞をするのならやりたいことをしたい、何を信じて生きていけば善いかわからない先行き不透明な時代だからこそ、

自分の価値観を頼りに生きる、と思わせる社会なのかも知れない。学習すること自体が入学に目的であったり、自己実現を果たすための入学であったり、年齢に制約されない生涯学習が実践されているといえる。

Ⅲ. まとめ

本稿では、専門学校入学者の約30%を占めるリカレント・エントリー者が入学を決める要因について、インタビュー調査を通してその内容の分析・考察をおこなった。その結果、多様な入学経路を反映して、入学動機もさまざまであった。しかし、大別して4つの要因に分類でき、仮説の通りリカレント・エントリー者の入学動機に一定の傾向があることがわかった。

それは、①OJT（企業内研修）からOff-JT（職場外研修）への移行によって、職業能力を自己習得するため ②就職難のなかで経済的自立を図るべく、就職に有利な資格を取得するため ③リストラを危惧し、将来に向けての付加価値をつけるため ④困難な時代だからこそ、本来やりたかったことを目指し、自己実現を達成するため 以上の4つである。

これらは就業対策と密接に関わっているものが多く、専門学校が本来からもつ職業教育機能が重視されていることが再確認できた。しかし、今日の社会がもつ多様な価値観や人生観から生じる自己実現や生きがいという職業教育以外の機能を目的に入学している側面があることは見落とせない点である。

入学動機にみられるこれらの傾向は、言い換えれば、専門学校に寄せられている期待であり、求められている教育内容である。少子高齢社会における専門学校は、ダイレクト・エントリー者にはもちろん、リカレント・エントリー者の多様なニーズにも対応し、学生が入学したことの価値を卒業後の人生に充分に見出せるよ

うな教育機能を発揮しなければならない。

注)

- 1) 本稿にあげたデータは、文部科学省、平成15年度「学校基本調査速報」によるものである。
- 2) 本稿では、高等学校新規卒業者（ダイレクト・エントリー）に対し、高校卒業後に大学や他の高等教育機関への進学や就職など何らかの社会経験を経て専門学校に入学したものを、リカレント・エントリーと定義した。ディレイド・エントリーと同意語として用いている。
- 3) 原清治 『専門学校の教育社会学的研究』科学研究費報告書 2003
- 4) 専門学校には、多職種に直結する学科が設置されており、便宜上8分野に分類されている。①工業、②農業、③医療、④衛生、⑤教育・社会福祉、⑥商業実務、⑦服飾・家政、⑧文化・教養

【参考文献】

- ・原清治『専門学校の教育社会学的研究』科学研究費報告書 2003
- ・文部科学省「学校基本調査速報」2002 2003
- ・専門学校新聞社「専門学校新聞」1998～2003各号
- ・ウヴェ・フリック著 小田博志他訳『質的研究入門』春秋社 2003
- ・清家篤『NHK人間講座 生涯現役社会をめざして』日本放送出版協会 2003
- ・矢島正見・耳塚寛明編著『変わる若者と職業世界』—トランジションの社会学— 学文社 2001
- ・財団法人 専修学校教育振興会 全国専修学校各種学校総連合会「平成12年度版 専修学校」2000
- ・原 清治・高橋一夫「専門学校生の学歴意識に関する実証的研究 —ダブルスクール生の実態調査から—」関西教育学会紀要第22号, 1998
- ・「月刊高校教育」編集部『高校教育年鑑2001—2002』学事出版株式会社 2001
- ・竹内常一・高生研編 『揺らぐ学校から仕事へ> 労働市場の変容と10代』青木書店 2002
- ・財団法人 専修学校教育振興会・全国専修学校各種学校総連合会 平成14年度版専修学校 その教育制度と現状 2002